

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11m 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11m 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

新編水滸畫傳 六編四



新編水滸畫傳卷之五拾四

東武

高井蘭山翁

譯編

明治三十六年
十一月九日
講文

○宋公明旨天に索報せ擒ふ後
呼延灼との戦已に十餘合に及々射れ。呼延灼鞍と揮て黄綾
とるより下にす焉。されど宋公明急に駆ねと馳て黄綾を救せり。
冥傍これと乃そ大小攻び大小の三軍をもひて一矢小攻をせり。呼延
灼これと徐て云將軍懲て去退。一矢もみれ。彼其用は廣く計れ
富一志さればいきなり奸計と殺すんも知らず。先是より引回

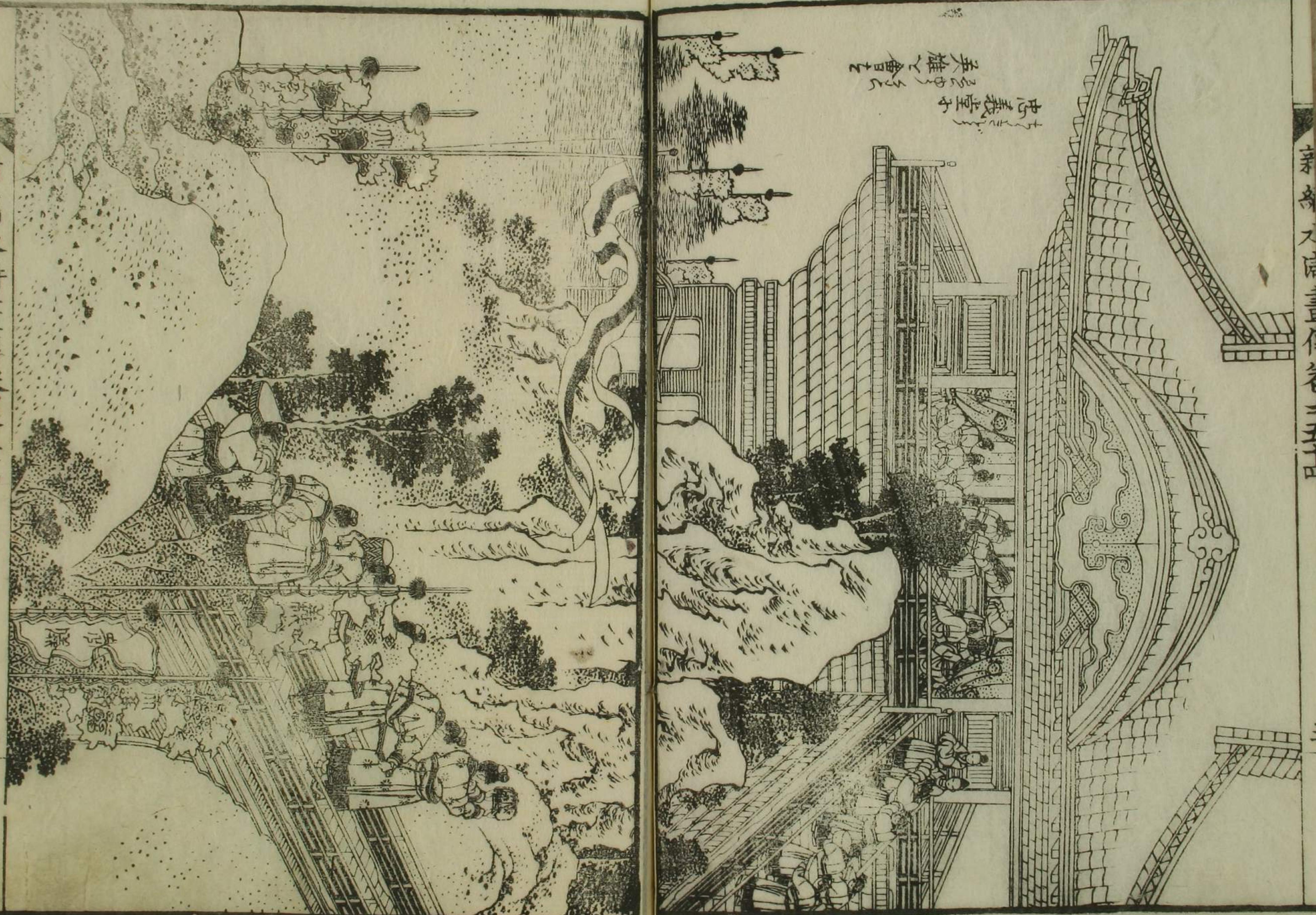
空と云々れば冥傍は云に殺し。急に弓を收めて車陣に引け種々の珍物
とまひて呼延灼と歎待冥傍黄綾が本歴と向られ。呼延灼差て
云。彼は三山を以て朝廷の友職と交へ者ありしを。昔日青州か

於て秦明花榮ホと共に城下降りても武藝不通遜一震懾
次秦明の弟子也。今日先は城と交傷ひ一矢。彼本空て锐氣と折て
もん。今青緹隊と切ば必大功成もと後りれバ。実務これと空
て本院斜きに別ち号令と傳へて宣撫都思文をニモ小口行
救急と。自ら又百のる軍を引て歩兵一と機一と發。至夜
未已に二丈の一矢を立し。昨延灼已に三軍と争てすてか。又実
務小苦て云。宋江必も陳中より石炮を放つべし。これとぞ裏裏
和合のお墨の石炮と切りぬいて。三軍と一度ふをもて跡と突き合
具一と云含め。別ち引て小馬うちより。約莫半時を走るに。前
面には八十人の去みて暗に低去ていも。こにありては我軍にて
へわくばや。まことに宋公明の密令と承り。此船を出迎へやすと云ふ。

峰延灼これと呼。以宋と己が軍中に加え再び出生不をんで能
々小。實務も同一く後に隨てお續き。又一つの山と勝りて
敵小。遙對面に一盞の紅燈をえりて。實務もと勒へ。峰延灼小
官て云。紅燈の主は飢れ。何れの地をも。昨延灼善て云。彼而
朝宋江が中軍。片附もとをりと。三軍と僅假して馳る
敵小。果して石炮の勢大に驚。是ぞ宋江が放さる。峰延灼
等の石炮うちと。實務已に先と砲て。人をもす。已に紅燈の
下ふありに下と至る。唯一人の歎もあらず。峰延灼も
もやるをえざり。實務は辭と見て大に驚き。舟を計にゆりぬる
よと。急に引退んとせられ。に方の山の上に廻と鳴。鼓と擂。
喊の聲は天地ふ震ひ。友軍を大ふ慌て各先と争ひて逃る。

軍務已れると圓て走り行。左右の親方と顧るにお役ふ者と、
又石砲の響き。下の伏兵一齊に並ひ起り。地上に鉤索を引て。
軍務が素もろと約側。大勢喧とわきつて。遂に軍務を投へ
堅に引抜に施さむ跡に馳行たり。又林冲花榮を各一彪の
兵と率いて。兵を擇り。月光の下小於。都思文が軍をと迎へ。林
冲尚先にとを出て。都思文と罵り。元帥軍務已に張扱れり。渴
む程の小酌酒ぞらとやりて。鄉と酒さるや。都思文それと咬て。太小
摺り。餘と摺りると歎せて。林冲と酒と交へ。残ひ未だ三に合ふ事
ある。花榮餘と摺て。歎りあじしが都思文。おれ小歎もと能ば。魚
にと勒へ逃げ。船小舟より女大娘一丈をも。自。鉤索を

投熱と。都思文とるより下に馳走し。既てこれと鄉り。車陳ふ引せ
り。林又秦明隊主は各一彪の軍をと引て宣賛を捉へんと囁く。果
て宣賛に遭遇。知れ。宣賛先ると出へて。大喜。不罵て云累。
山泊の軍威匹敵。我に歎ん。志を死と歎。我小避ん。志ハ生と保つ
べき。ゆゑ。多く悔と寢て。我軍ると。秦明。これと。やつて太小
摺り。ゆゑ。躍せ。持と。勝。宣賛に。かて。萼す。おね。遂に。軍累と。交へ
數合戦ひ。よれに。孫立。後う。歎り。車。宣賛。これと。又。太小
氣力。勿も。衰へ。秦明。持と。舉て。遂に。宣賛と。ま。と。ま。と
乃。三軍一處に。砲合せ。將て。宣賛と。活捉。此時。撲天雕李良
を人よそ引て。軍務。車。陳ふ。突て。入。先強横。阮小七と。救ひ出。て。
おの。具。糲ふ。と。奪。一度に。呪と。猪喊と。揚く。宋に。ぐ。車。陳ふ



を重き
馳約多り。ひか於て降系する。友軍さんも數を殺す。宋江已れ
従ねと会合」と山陰に上り。東方漸明より、已れで猪郎
銀忠義堂の左右小坐とする。軍卒殺て、冥界宣誓赤恩支
ホ三人となり。宋江見て、驚く。堂上小坐せしめ。宋江歎息
索と割解。先冥界を抜けて。堂上小坐せしめ。宋江歎息
るして云ひ。死命の枉死。ぬ軍の虎威と犯人四罪も輕
い。伏してあちこちへうれと見えり。又冥界に辭を
ば。伏してあちこちへうれと見えり。又冥界に辭を
還り。死後火葬も又冥界と相成りて云。宋江小號令と甚と
犯軍を殺さ。遂に計に詰めさせらる。罪財に餘まわり。作は實者
多く。恭々やむん。冥界に生れと感し。暗小ち有る
列府。豪傑をてる。いづれ皆一雄萬子の勇士。

と見え威風端嚴として義氣沈々。以時宣務改と聞。宣贊部
思文古人小對して云。我們已に縲絏の恥を負ひし上へ縱ひ一令を
曉くとも。何の面目みて。再び敵に回んや。あうじ一刻も早く殺
されふこそ。三人等。宋に一死せ乞ひ。宋に大不
驚き云。我軍に何を乞ひの。と言。倘主と弃ゆば
我は山陳に爲り。仁に大義を絶び。口。天不習て方を行ひす。
又。又。主。が鄙滅と嫌ひ。ひ。成。口。天下の人奉て宋
ね。軍。ホ。と。敵。送。せ。を。主。ベ。實。猶。嘆。じ。て。云。下。の。人。奉。て。宋
君。の。清。徳。セ。称。ノ。タ。果。ノ。て。仍。う。べ。主。か。わ。く。と。又。奪。リ。ゲ。く
く。困。め。れ。ど。も。投。げ。し。宋。君。い。よ。く。我們。を。山。陳。小。敵。め。ゆ。く。奪。
下。に。在。て。奪。鈍。の。力。と。盡。す。だ。宋。に。は。主。と。呼。て。大。小。抗。び。被。て。囚。富。と

役りて宣務ホ三人を歎待り。又唐集しる支軍八七子の去
を小も多く渴食と与へて懇に接論。一うちれんば底皆假びに傍が
り。至内小も年老する者せん多く盤纏と与へて。左國不拘。うれ
各宋公明が仁徳と感じ。故て嗟嘆と惜しぬ。翌日宋江ハ宣務
眷族と山隣小邀へれども薛永城蒲東郡に歸り。已に宋
江ハ宣務ホ三人の英雄と以て心中にまで收び。次日も又張榜を
集め。飲宴をかゝる。忽ちと盧俊義石秀二人がとぞおひ
出。竟ば波と流りてされば異用とぞ察して。宋君必ぞむと幽
かれてえられ。宋江に計めり。明日再び去と記して。小京と攻ん。何を
功を立ざんや。と。おど云も絶えざるに。宣務をもぬて云。宋江も。宋
君の大恩と報せざれ。恐くはは圓の先陳をふして。猶心力とぞす。

宋江是とぞておど怪び。劉宣贊郝思文とも宣務に接へり。先
詮く。翌日先梁山泊とぞ立る。す終の大船ハ系の數に一人も缺く。
乞く皆宋江にお終ふ。乃又水軍の大将李俊張順水木同く後隊
よりを率ひ。以時梁中書ハ索紙が矢敵平復。一と望せんが為
要く。しく酒寫と役けて。索紙と邀へ共に酒と酌て居る。如小勿ち
人の軍士來す。宣務。宣贊。郝思文。故て梁山泊の残ひに左廻三
人懸く生摶れ。悉く城下落陣。今宣務ホ城の先鋒とぞり。萬
城小考來り。伏後の合戦へ向ふ。吳うり。をぞも強く働か。城と落さ
む。引えずと極く。向ひと葉くや。傍へひと苦。一ふ。梁中書懸を
天外小考。一と警ら。向ひと葉くや。傍へひと苦。一ふ。梁中書懸を
軍小流矢に中り。りれば。伏後の軍小へ入歎と射て。伏後を報ひ。もん。

相公心ぞ雄とてゆべからん。梁中書公とてゆて器力を以て
ども内に多き恐怖。即時小去と候。索詰にあへ先隊外小生
じて歎と迎へ。あは達李成をすむようすやねば。時仲冬の天氣を
害際風起て附更寒きなり。宋にが去もゆりぬ。呼え。索起
ち人るを引て。危虎峪の辻に陳と列ひ。翌日。お軍陳勢と爲し。各喊を
びり鼓と擂て。戦と挑み。宋に。此時呂方郭盛と引て。多き聲
上り遙に残と一聴は。大刀冥拂ると躍せ。刀と揮て。陈前に跑出る。索
詰これとて大小罵り。急に軍策と舉て。冥拂小拂て。冥拂已れ
刀と舞し。これと迎へ。お將勇と奮て。お勵。戦ひ。十合斗に衝り
如小索詰済く。余力衰へ。李成先と見て。お刀と振て。仰けある
宋に。が陳中。ありも亦。宣誓。郝思文。各軍策と拂て。突て。お説
七

の。る一塊不滅て。攻陥。宋に。これと見て。急に三軍以下知。し。ふ。梁
山泊の精を。ども一度不減の勢をあげて。續後れ。と攻來り。五圍と
散くに。歩々。李成が軍る大不れれ。七日八絶。と這く敵中に
逃入り。宋に。ハ軍るを。をもて。城下。小。す。寧。陳と列ね。ま。と。也。
る。翌日。索詰一彪の人。るを。引て。走。と。が。兵用三軍に。命じて。い。く。
索詰と。迎へて。戦。と。詐。と。放。と。卒。彼若退。あ。が。號に。至。て。引。退。れ。と。
計と。抜け。り。三軍。計と。放り。多。さ。と。索詰。一。戦。不利と。お。て。大。不。義。勝。と。も。先。城。中
ひきり。あ。よ。お。を。き。小。入。る。ば。夜。大。を。歩。り。降。り。れ。も。是。用。是。ふ。後。て。計。と。放。け。兵。干。の
主と。城。外。の。山。辺。小。歩。て。踏。坑。と。掘。一。ら。き。上。下。は。去。と。用。ひ。と。蓋。ひ
る。ふ。ば。夜。雪。ま。す。く。大。不。と。踏。坑。の。上。に。約。莫。二。尺。を。う。隊。積。る。罷。

平地と坐りして。更に坑をともどりえざる。翌日敵をかみ宋江が軍をと
ひを。各處より來り。我亦出で戦んと云ふもようりり如に索超まで
三百の軍をと以て城外小弛を。遂に一戦を始め。宋江が人を大
小波乱にて。八面に奔走す。くるれに水軍の大將李俊強敵を住す。
索超を迎へ戦ふ。二三合にて。李俊強敵一日に逃り。索超大不
可。追來る彼友人の段敏へ擅れ索超を縫して。陷坑の内にあり
けり。横に切きて山の下の洞間に逃入。ソノ後お續て、追蒐
れに山の背後より炮の轟雷と響く。陷坑の蓋忽ち崩れ。懷
むべく索超はるゝりん坑の内に落入る。左右の伏勢並び延々遂に
索超を捕れ。宋江が軍陣へ引渡し。是によれて友軍せし
大ひに驚き。多く皆城中小逃回て。梁中書に別と報づる。梁中
書は恵も宝と失ふる心地にて。且只城を堅苦にちじめ。再び出で
残ふとる。

○ 托塔天王夏中聖と頭を

うれ宋江は去と收めて。やがて。既に然の伏矣也。索超を施て
帳前小坐りて。宋江見と見て。自ら御の索と割解て。帳前小坐せり。
再三接倫して。云我山隣の豪傑也。大半は朝廷の反職。又天緑を
食ふ。やがて。今上皇帝明す。奸臣志とば。佞人權と。是を
妄に天下の民を傷ふ。我まことに避て。梁山泊に引籠り。天に習て乃
義に參り。我一点の呉ひをねざべとぞ。只嘗詞とぞ。と詠ふ。いふ。
索超ゆく宋江が德を感ふ。遂に降系。宋江是用斜

大悅。終夜佳宴と具て索超と答應。翌日又滅と破らんと商議。一連に數日も痛く攻めを。直正落べき様も見えざる間。宋にまことに憂罔して帳中に疲れま睡り。かれ忽ち陰風颶々として驚氣人ぞ驚い。ふ。宋に怪やと段を捲て情を見る。小托塔天王晁蓋が靈魂現れ。宋に小示して云。宋改飯汝。山陣に崩れ。宋に鬼と呼んで坐て恭々跪て云。晁天王今うれし靈魂の在れゆ。おどる者鬼の一族とせざる故。宋昼夜見天王の仇を報んとのを乞ふ。鬼小け。など安んぜず。頃日又不意の難兵出来。そひてえ。元をひき。軍と死。折す般小乞をな。久く。靈魂とも祭祀せむ。ね。休して重々へ。伏罪を免へ。晁蓋が云。我今此にある。主事の名ふべ。足下不百日血光の災あり。只毛と若んが爲へ。南の地のいと向るに。呉用が云。晁天王已に灵と現へ。又上ハ疑ひゆふと。今中冬の内かふて。天寒く地凍。軍る久々。也考ふ。北。先山陣に回りて。冬をもじて。迎へ。暑消氷解。もひ。も甚再び去起。て。け城と攻べ。これを上計。宋に云。軍師の玄徳も可と。之を只恨く。ハ盧員外石秀裸縄の肉に立て。只戰まつ救ひ。侍らんに。我多岐陳に及ばず。軍中書被あ人を殺す。車己に。我小出ぬと。渾瑊。一交で。さる。小聖。日宋に改痛を禁がく。して。

熱発ノリ。れハ猿大ね大小猿さる辟いふと便ひる。宋君が背の上ふ
狩物生ト。毒を包ヘク。異用これと見そば。猿物癪小めびんば。別
症うるん。弟急に療治を加へせんじゆ。しき大事ある。そもト
医療と豆ト。れども丈にモ強た。時小殊順をも出て云ひ。未
き日。潁陽に小生。一時。老母疽と病り。やあ。未百葉を及し。療治
と加へ。うだ。旁て驕きり。男外に。後建康府より。安道全と。外
科と。清て。療治と。教へ。被人只一貼の膏藥を用ひ。最易く。痘
く。宋君の。以病若安道全と。清て。療治。みそ。めが。立妙。驗み。られ
せ。以れより彼地へ。ぬ。太遠り。か。子達ひ。あり。か。あれ。也。未連。秋小
を。か。ひき。馳て。彼人と。達あ。可。りんや。異用これと。呼て。云ひ。宋君の。事に
ま。え。う。の。見天主の。宣ひ。に。あ。の。地の。天星被。され。と。詔。に。べき。の。言ひ。ふ

代安内全不意するの歟。人をひて療治せり。此病立
知小瘡んと。何の疑うめりん。宋江號て毛毛小腹。
別張形小對して云汝。いよく主人の。彼地小馳て誘引。速乎我一
令と救來と。修儀ぞ命令ト。又三十支の向銀とねて
安内全への謝礼と。又八十支の向銀とねて強收。鴻費と。
えと強收小与へて云。め今日發艮。ふく彼地小憩ミ宣
金と詰て壱に梁山泊小ゆ。我今三軍と收めて。後隊を
時小て安内全に遇ベ。と。妻細具に令ト。強收一々終嘗
1. 遂に宋江に別れて。即日陳亮と出東と見て。を奪ひ。折黒用ハ
ま。号令と三軍に傳て。駿陳の用意と。既て宋江と轎に乘。一め
主役陈と拂て。梁山泊へと引退く。城を放て。敵の圍るを見ゆ

也。向に伏兵の計ふ中て挽氣と折り一付落されば。又もや詐の計も
んと疑て敵てこれと追うちり。翌日梁中書猿ぬと聚て。宋にヶ攻陳
の意をいふと問うるに。呼達李成善て云。是用ハ原末詭の計多き。
されば。多々未だ分明に曉されど。只城せむてかざる小如と云ふと。
竟小艇すること。愈々れ。お社に張帆ハ宋公明と救ひと歎一夜と日に
續で急ぎるに時。一も冬の末にて雨降。それバ別毫路を中窪て
子江を經近りし。日小風太小作り。凍雲低く。禽飛く楊として
難能有りし。強帆自ら船これ小様。已小數千里の海と馳て。漸楊
す。天大一小毫障。竟沒財文格列之。強帆せ張帆ハ。代日江と渡らんと欲
ひ。奮に楊子江とそんて號めり。あ小江小江て渡り。船やると弱き
られま。一艘の船も見え。強帆ニハ云と懼。又蘆葦の内と窺ひ
をびて。一艘の小船を繋いで。蒹葭源をれにあし。強帆糾ちぬて船
家を。舟を船と教小僧て。代江と渡り。あふと云う。一人の漢子船積
小立きて。問うるへ。客へ何れより來て。かれ小舟ゆ。強帆答て。我今
ひ江を渡て。建康府不行んと考む。我船貨と厚く術せんかど。ア
濟。一もよ被船が去が云。我坐客船。濟一をせん。寛易れと。され。今日
あ紅日下西小修さり。縱ひ江と渡り。あとも。被江小於て。旅扁を
傍す。えんれ。先我船小索。小舟ひて。而立の前後。左親に歌。右。因
辭。小月明。小月明。方。我好船と。生一を客と。渡り。をすべり。多く
船貨と。船と。強帆是と。吟て可なりと。終焉。ふなり。船家長
遂に強帆と。途へ。船小索。一も。再び蘆葦の内と。纏ざり。

○浪裏白跳水上に寛と報せ

宋公明益中子

晁天王

感格



張眼船小入篷の下に乃ちに一人の後生火を燒てあしらひて湿衣と
脱いで被後生に烘しき。又包袱の内より襦の衣と丸出しと云ふ也。
身と枕に靠て歩引るに連日辛苦と経る。旅宿されば列して熟く
睡り。初更の時分ふれま。あく睡醒す。一て体起きて光系へ被後
生張眼が包袱蘊と見て船家を不告て云々。ハ後密に包袱づき
小氣と附り、一ぐいりいう様物もと見えて、辛く見えぬ。船家もこれ
と云て私も初思ひ一とて暗に張眼が枕の邊に立倚て包と趕り
見られ果してねめぐらう。船家は被後生不對と云ひてお
と漕出せぬの内うて被と穀をべきぞと、被と縫の索と解り
船とゆふに漕行する如に。船家も遂に帆索と改めて船と云ふを小手
小綱められハ張眼をうち睡醒。挣扎とせり。もや強く鄉うけられ

動くと叶はず。船家も已に刀を持って。強盗が前にありたり。強盗再び
侘て云々くは我命と焼けし。全銀を投水へ定下小達べ。
船家も云々事已小舟ふす。我坐して海と対面す。只枝く一死を
交よ。強盗が云ぬ。君力と仰て。我を砍死さば。我は寛の魂承く海ふ羅
矣。而我身軽と傷す。而水中に沈めむ。我死て九泉の下奈於て
も更に寛み。船家もこれと呟て。ぬく不至と准ん。小舟我と恨つて
久とて遂に強盗と把水中小舟り。已て船家もハ包袱蘊
と見て肉と見ゆ。若干の金銀を取られ。忽ち被ひ生ト。これと少るに
思ひ。被後生と毅。已一人が福にせんと囁く。暗々被後生。浦野
と窺て遂に毛と毅。屍と水牛に投入。再び船と漕四。折被
張帆。原來能水性と識。三日三夜が間。水底に伏す。りよ。若く

疲れざる水軍の大船されば。此時船底に沈みぬか。一も若だ
自ら水底に生て夫と礁と貰ひ御の索と礁の夫と當て。遂に是を
擦斷して水と鑽て南岸小島に至る。樹林の内うち蛇の兎肉を吃
ふ。張吸烟の上に眺む。赤小樹林の内小入て。此れを窺ひ見るに。是
が強吸烟の上に眺む。赤小樹林の内小入て。此れを窺ひ見るに。是
が別一軒の酒店へ。張吸烟にて門を敲くる。一小の老翁出一。張吸烟
を恭へ。翁と云は。老翁は体を見て。同様の湯は定ら。海城小
遇する人を。殊吸烟にて云我建康府小馳て魚肉を買へんと欲
り。如小腹。故人の船頭を小衣服全銀と奪ふ。素と痛く御て水中
に沈一。老翁來水性と識る。一傘を免れぬ。伏して。那老翁
文東眉と焼の難を救ひ。老人是と嘗て憐小思ひ。前庭て後
堂にゆり。比々天小水と熱て喉凍ひもんとて。大盆酒水と与へて寒を

省せ。一。張吸烟感激不堪ざり。老人再び問と云汝の鄉へいん。建
康府。又何事。事至て。馳ゆ。張吸烟て云。某山东ある姓。張
へ。建康府の大医安。金へ。某。足牙。今急事。小固て。彼と彷彿と
欲。老翁。云。汝。定めて。山东。よう來て。渾山泊の下。と。よ。う。よ。く。ん。
強吸烟。然。宿。も。彼。山。の。下。と。泊。て。汝。に。ゆ。り。老翁。云。我。汝。彼。山
の。主。及。時。宋。公。明。へ。住。處。の。旅。人。と。劫。び。一。て。生。死。と。害。せ。ぐ。と。き。れ。ば。
誠に仁者。を。謂。つ。べき。人。へ。張吸烟。云。彼。宋。公。明。は。も。う。た。義。を。め。く。と。き。
良民。と。害。せ。ば。して。唯。大。烈。の。友。人。お。そ。殺。し。の。も。老翁。云。宋。公。明。不。相
信。ふ。豪傑。も。同。ト。く。天。下。智。て。名。と。稱。し。貧。を。救。て。老。と。御。け。係。に。百
姓。と。隣。む。と。ある。れ。我。が。知。れ。り。宋。公。明。と。ぬ。ま。ん。彼。を。友。う。小。悩。う。く
て。こ。な。く。居。民。を。生。涯。と。安。ん。す。く。小。と。と。只。顧。宋。に。う。往。と。暴。ひ。一。が。

張公明見て恨んで云ひて。我はが由来ゆうらいと老丈おじさんに告つげひさん小必こひも警けいまこと
ゆきれまゆきれまこそ深山泊ふかやまど小於こごくて水軍すいぐんの取とり飯めし。浪裏なみ自跳と張公明はりまことと云いあら。今
宋公明背せて賊物ぞくもの生うす瘡うずきが死死ゆゑ。獎金じょうきん一百ひゃくを送おもてて安道全あんどうぜんと信
書しょんと欲ほしるに至いた。船ふな夜よ中なかの勞ろうに依よて漁船ぎふなの上うへに熟睡じゆすい。一いつしらふ。
彼かれ敵てき人の船ふな長なが索さくと縛しばて水中すいゆうに沈沈められ。至いた水底すいそこに伏ふくして郷ごうの索
と礁せうに當あて擦こすり。這一いつ命めいと脱だつれてば如いそにありぬ。老丈おじさんり實じへんに宋公
明むぎょうの德とくを慕まつひゆふ。ば翁おきな一いつ點てんの情じようと義ぎと老翁おきなが云い是これ下くだ隣隣で
樂山泊らくさんどより來きり豪傑ごうせききく。先さき秦せんが畔はんに遇あり。秦せんと別伴べつばんを離はなれる
なる如ごと。一人の後生こうせいをりかて。張公明はりまこととねねりて云い。秦久きんくく張公はりまことの大名
と呼よ及び。一いつせ。縁えんを失うしなして走はしと罵聲ばせうを抱いだせざる。今日けふ始はじて風かぜと
接せつる。莫大ばくだいの事こと。秦せんが姓성。王おう名めいハ定六じょうろく。秦せん又また跳とちる。收うされ

人ひと皆みな諱名けいめいを施ほど。活は閻婆えんば王定六じょうろくと称いふ。秦せん未み師しに經へて學がくひし、
以よも。持もと復かひ水みずと赴たとハ廻まわる是ぜと曉あ。張公はりまことと初はじひめ。五ご人の
船ふな家いえの衆しゆ放はなてこれと知しれ。一人の截せき凶鬼きゆき張旺はりおうとと又また一人の
後生こうせい義亭縣ぎていけんの民みんふて。池裏鰐いけうち孫三さんさんとと也よ。ば古人こじん考かう此この中
以よも。我わ店てんにて旅人りょじんを惄こゝ。張公はりまこと我わ窮きゆう數日すうじつ逐よ。更また内うち不ふ彼
とと咬かて大お小こ感謝かんしゃ。一いつて云い。星ほし下したの慈志じし強きよ小こちんちん。我わあはれ無む數
日ひ逐よ蜀しょく殺ころ。仇かたととそそ轍わ。我わ強きよ公こうととりりは仇かたとと轍わ。張公はりまこと是これ日ひ
遠とほ康城こうじや入い。多おく安やす万まん金きんと往むかて山陣さんじんに聞き。王定六じょうろくははてて叫さけて再
びまわ。別べつ一套いっしゆうの衣いぬ緒しよと十じ枚まいの銀ぎん子ことと張公はりまこと送おもてて銀ぎん緒しよとと叫さけ。元
張公はりまこと是これと謝あや。翌日つと王室おうしつ六ろく爻子えいし小こ列れ。建康府けんこうふ入い。重まに槐かい櫓や

の下に至て安道全が家に入り如次。安道全者ひ帯子とて遇へ。強吸懸歎小舟をうね。安道全云々。我久しく張公にまよえさう。今日ハ何事の事あそ。自ら即ちかひめや。強吸苦て仁州と闹しめ。宋江と共に梁山泊に上りしと。一く後り。今又宋江明脊に殺れ生へ。終る。うち資金一百両と送りて。先生と山陣に信んと欲し。已れ楊子江小吏て。海城小遂小金子と奪れるとと具に告げ。安道全が云。東公明ハ尚世の義士。されば我山陣不行て。病と療治せんハ能ふ。亦すりといへ。嘔血死して。家事と嘗む。若きときを遠くせんとも猶りれど。余ゆら。あるきで。それぞ因て。ひづくと若々。強吸大不憂て。先生と辭へ。あり。余も亦再び山陣にゆうべとて。再び高きれど。安道全これと隣て云。我尚宣——商機——。されば行きはん。張公も憂と休む。強吸氏

言とつて大不快び。先生り。考とねり。一山の福徳車り。これにふんや一向涙と流して。やうに。安道全も志の功なりと感じ。遂小飲堂——。と。建康府一人の妓女。李巧奴と云ふ。あり。宿儀十分。小資金也。安道全者に睦ト。往來——。次後安道全。強吸と引て李巧奴が家。小金。強吸と歓待。泊已。不蘭。——。小。安道全。李巧奴に告て云。我今晚ハ此次歇。明日ハ汝不別れて。以張公と共に。山东の地に旅く。延泊。時ハ一ヶ月。脩りあり。日。強吸小舟。再び。聞て汝不遇。之を。方。汝。自。多く。保護。——。我。ゆる。旅。——。李巧奴。あれど。ぬめて云う。君いふ。そ。我。と。弄。て。遠く。往。あり。や。旅く。へ。此度の。外。出。と。休。食。安道全云う。止。旅。之。と。左。我。已。れ。旅の用意。と。調へ。されば。明日。あく。乗。是。ま。し。汝。公。と。寛。け。待。之。我。一日。も。す。

張順水底小
縛繩走解



人殺ま
無道全也



て再び見えんふ。汝行ぞれど憂るや。李巧奴又云。君孫我と弃て
行かゞ我へ。參商の憂に遍て。絶にお果べにて。一度ハ泪を
洒さ。一度ハ情を含て。再三實一やうに。殊一うべ。強吸へ傍に立て。此
光景と見晴に眉を皺りて。苦しき。比肉天色已に曉されば。李巧奴
於て安道全と延て。森ろ小入宣。歌一え。再び生糸強吸小
對一と云ひ。客へ先施席にゆり。我は机の房間も。漫う。さ
ゆゑ敢て。坐り。と。安先生の起ゆよと。待て共に。ゆき
弓背く。ひ組と。傍すへと。安くと坐り。李巧奴止と。ひすと
傍の房間に歌せ。強吸。強吸は独聴く。と。い。睡らざう。然
に二更の時分。小門を敲く者。強吸。慣て壁の縫間より。足を
見るに。李巧吸が母走り。門と戻。一人の漢子を。入て。息女と

あふ立やと。官なるに。母答て。今宵へ大医安。金本て歌まれ。彼
を先回り。彼漢子が。我今十歳の娘と。息女。小送りんと。詔。老
娘宦。一。方便と。回して。警時。うち遇り。母。已にかくの
ごん。汝先我房間に。入て。休り。我。刻女と。呼で。遇り。ひべー。空
船掌。一。うち。張吸。彼漢子と。見るに。乞利揚子。江と。金銀を奪
え。海城。載に。鬼強旺。て。比志。考に。江中。小舟。て。残材。と。む。時。李
巧吸。家に。きて。遊興。と。う。と。や。強吸。これと。見て。想つ。に。寝。う。ね
忽ち。母出ん。と。し。る。が。又。ふ。ま。つて。保つ。と。り。や。の。う。ん。と。思。ひ。聲。く。ね
効。靜。と。察。ひ。る。に。彼。老。母。湯。と。具。て。強。旺。と。款。待。又。女。李。巧。奴。と。呼
べ。て。相伴。を。良。久。一。興。小。入。て。飲。酌。と。う。一。早。老。母。矣。に。あ。人
の。下。女。は。遙。に。各。房。門。と。出。て。枕。の。下。に。辟。附。名。れば。強。吸。是。と。見。て。暗。小

おひ。房間の戸と推定て、厨の邊にあり。一把の菜刀を擎りて、先被老母と殺され。歟人の下女叫びんとせり。久々、強めに聲て、死も更小生る。又張眼又刀を揮て、歟人の下女とも條に砍殺す。亟に房間の戸へ入んとせり。李巧奴も睡すして、ば發勁と喰候事あやと。又小房間の外ふ出へる。強眼又、れど砍附るに、強旺の房間の戸より。ば光景と暗に見。窓小窓と鎖牆と鐵て、迹とり。強眼もと悔りん。益々、これよりぞうり。強眼うれし於く。聲く沈吟く。ううりりが。既て夜の襟と血に蘸りて、人と殺すあるを、安乃金と白壁の上ふえ。明小書付ね。漸々更の夜後にて、安乃金睡と醒す。房間の戸より。李巧奴と呼ぶれど、強眼を入と云。先生考と例ゆべし。先生は、强見えと。人の屍を見せり。安乃金忽ち撫と改じ。といふ。

ト宋れど、張眼又粉壁の上を指さすていも。先生壁の上の文字を見定。安乃金これを見て、益魂と教す。張公何と云。我を苦しむやと恨み。強眼が事已にばれり。何為恨と起りゆ。先生せり。教とるて、呼びゆ。我自身逃まて、獨と先生の身の上に干く。又、獨と脱んと欲す。遂に東と去れ。梁山泊小上て。宋公明の病と救ひき。二つの事孰をふても。先生の事小姓せよ。行ふべ。安乃金見よとて云。強公已に此のてれ罪と犯す。ひゆる上は禍ひ必ず我身みも乃びべき。小孫強公小捨て。梁山泊小姓行べ。と遂に經營へ。強眼大不快で。安乃金と共にばれと誰を坐て。亟に王定六が家に來り。如ひ。王定六告て云。雖自強旺ばれど。さうも強公に遇ざし。を惜うつれと悔ひ。強眼反て是と諦て云。

汝れを悔るてゐれ。我を只宋公明のあひに大事をあへんことを思つれ。
何ぞ是らの仇と急氣不掛て。自う宋公明のことを忘れんやと。あひ云
もゆきよに。王定六不思前面を見て。忽ち躍起て。もうう對面を指す。張
安俊と見ゆ。對面ありある漢子。乃張旺と。若きれば張旺是を見て云。
先彼を警一もとみられ。只彼が仰れと見。便車を行ふ。と。暗に
窺ひ。夕。強旺已に。は邊に歸り。船せえ。立られば。王定六を出で。強
旺。之を船と假て。我あ人の親族を。渡へ。一免り。と。ゆり。に。強旺
云。船と。僕んと。くば。あく。客と。引て來り。王定六。が。か。刻等き
来らん。船一。船。停て。待む。と。あざ。船。小。田。で。強旺に。か。と。若きれ。
張旺。別。安道。全。小。對。一。て。云。去。來。彼。船。小。索。て。械。と。毅。さん。我。小
後。て。來り。更。と。王定六。と。共に。三人。舟。く。江。邊。小。立。し。如。に。張旺。船。て

船を漕つけて三人を。乗。し。や。一。船。強旺。暗に。船の内に入て坐。一。船
す。く。江。公。小。立。一。時。強旺。云。船底。破れて。水。湧。へ。ぞ。船。底。破。れ。て。
来て。これ。と。塞。げ。と。喰。一。船。強旺。計。と。爰。小。も。知。ば。急。に。來。く
船。船。の。内。に。入。ん。ま。で。處。と。強旺。速。に。これ。と。歎。へ。大。小。罵。く。云。
汝。滌。械。前。日。を。練。も。我。と。歎。て。金。詔。を。集。ひ。ゆ。汝。尚。我。と。誠
徳。ゆ。や。強。旺。先。と。ゆ。て。勿。ら。作。法。只。揮。ひ。標。く。び。く。え。強。旺。又
向。て。云。前。日。の。後。せ。ハ。何。方。船。に。立。ざ。や。強。旺。言。て。云。前。日。未。金。詔。と
見て。欲。ん。益。紀。り。彼。に。少。与。へ。ん。と。と思。び。ず。遂。れ。我。少。に。う。け。て。砍。殺。一
ひ。く。弱。く。へ。豪。傑。未。が。一。命。と。燒。一。船。強。旺。笑。て。云。汝。ハ。我。と。何。等。の
者。と。思。ふ。や。我。と。原。尋。陽。に。立。づ。し。強。旺。と。云。者。そ。今。ハ。宋。公。明
小。陸。の。梁。山。泊。小。立。づ。遍。く。天。下。小。縱。模。一。人。皆。怕。モ。く。い。と。ほ。

我弟水性を効く。若日水中に沈られし財遂小滸て死すべりとも。
我弟ひに梁山泊にて私子の大ねぐら。水練の妙と抜うがれ。水中小
築日織夜とまひて沈立とも。陸上小脇ひとほ。ばれに水中小て綁り
索も切解。幸れ余と脱れ。今日又汝とも我がとして沈べさる。汝
水性を効く。我が一命と免れ。百年の壽と保てとも。強旺
とる。余小も小鄉。水中に沈めり。王定六見て歎息とぞ懼り
たり。三人遂小舟を漕て巻巻しる外に強吸又王定六に對して云
る。彼下の私志と没するまであれど。汝弟跡我と争ひはずんば。そん
父とあれかと收拾て梁山泊小より宋公明に遣へ。而の豪傑と
大義と結びかんや。王定六れど嘗て云り。強公の宣ふ。不識小我心
不合。我老父と商議して後よりある。き方。強公は安先生と共に先
生しる。小固。遠路と歩き。慢ざりなる。勿も疲れて一步をも
行と然ば。多き。難民ふ見えしる。強吸自ら安名金がよと撫へ
景坊の肉ふ入響く。休息し。車一駒にか面より一人の旅あれ。ゆく
景坊の肉ふ入響く。強吸と見て勿も休て云。陛下を何を乞ひ。遙
瀧に及びぬ。と云ひ。強吸と聞て。強吸取と撫て。行人と見られ。是時朴翁
太尉戴宗と張吸急々寄る。金と書て戴宗に遇。先宋公明の
病近日めぐと同るに戴宗答ていり。宋公明已に病す。比日の未
の飲食も用ひたり。て。精神も衰へ。旦夕死を待のをす。と。ま

筋りも絞りきるに強め大小哭て泣き縁へ降る事のとくへ安乃至全爲
云を嘗て宋江終尚痛く是れゆゑと同氣れど戴宗至るを云。毎日
朝う夕に即ち主と苦もすれば教及憔悴して神思昏
寐一危とぞ大急也。安道全が宋江終果して猶痛と見え
事ふきば。病後ち療治候うべし既ち只恨ハ日限起引」と
憐つとあらん戴宗が云來。幸ひ神功の法をして。一日の内に八百里の
路を駆けてにつの甲冑と股の上に薦へり。又見まゝ見まゝ見まゝ見まゝ
甲るぞかと生坐の股の上に薦へり。又見まゝ見まゝ見まゝ見まゝ見まゝ
え坐て。安乃至全が股の上に荐り付自も又二つの甲冑と用ひて、三
人同く坐候せ。戴宗又張弓小對して乞りて。足下を渡りて寝
くとあり。然も先安坐坐と共に。一刻もあらず薦せよとそ。
已に神功の法をみて。薦がて。跑行たり。極強めに成村に一夜日遅留
一て強めの疲と休息し。且又玉堂六丈あるとよりあらんとん待して
居る。然も老父と共に山村にありしが。張弓されど擣へて大少
候。然も足下と待て。於は如に度量せりと云ひれハ玉堂六丈予
源く是と附し。又安乃至全が車を官なるに強め具に若て云。安乃至全
ハ今幸い戴宗來て先迎へて。山陣に馳聞りぬ。然まも云來後と慕
て意むじと。二人連れ成れど亦坐。坐し深山泊と車んでを乗じ。去
程に戴宗の安乃至全と引て。薦がて。久に馳へ。不日。深山泊に着し
る。然も大小の法政教れて安乃至全と迎へて。宋江が床の席にあり。さ
あた全先宋江が教及と見て。其後脉と仰ひ別お笑と云ひ。問ひ。御政教
必び當も。と云ひ。脉辞か。もしく。を血氣哀へぬと云ひ。是も亦

妨かず。至傍邊とすかひゆねを。只十日の内日へ平復すをす。然
既終はまとぞ。一度小安ち全とぞ。而て捨びる。安ち全極く外ふ敷
貼の餌と侵ひ。内には大蛇の刺と刺ひ。医の秘術と匿して療治とし
ば。また十日も過ぐるに大々小々多き飲食者のかくに至る。數日と遅く
往く。去程小強所の王定六父子と引て。此日梁山泊小車の宋江に見え
て。楊子江の車等一い洋に従て。王定六父子と宋江をびに強所に小
見えり。その後に虎皆体となり。宋江ハ病已に變りしが。翌日呉學究ホと商
議して。小京城と攻めり。盧員外石秀あんと救て。か義の志と氣さんと
争うるに安否全されど。殊て云。宋君の病未だ全く痊がれ體にして。遠ち
おべう。後再發せば。また療治も。を詰めんと強うべし。呉學究
も曰く。殊て云。宋君是らのとどを多めに掛りひて。神恩を傷ひまよ
の。傍観果していん。次巻と續て却づ。

